

『漢籍國字解全書』について

町 田 三 郎

(一)

明治四十二年から大正六年にかけて、早稻田大學出版部は、四回に分けて『漢籍國字解全書』（全四五冊）を豫約出版した。江戸時代の國字解いわゆる「先哲遺著」と新たに注釋を加えたものとなるが、書名及び注釋者を表示すれば次の如くである。

第一輯

孝經・大學・中庸・論語	熊澤蕃山・中村惕齋
孟子 帝範・臣軌・家訓	中村惕齋
易經上下 附啓蒙・階梯・本筴指南	眞勢中州・松井羅州
詩經 附詩經圖解	中村惕齋
書經	大田錦城

『漢籍國字解全書』について（町田）

第二輯

小學 附童子通	中村惕齋
近思錄 附訓蒙用字格	中村惕齋
老子・莊子內篇・列子	山本洞雲・毛利貞齋・太田玄九
孫子・唐詩選	荻生徂徠・服部南郭
古文眞寶前集	神原篁洲
古文眞寶後集	林羅山・鵜飼石齋

春秋左氏傳上中下	加藤正庵
傳習錄 附傳習附錄	三輪執齋
楚辭 附楚辭辨證	淺見絅齋
管子上下 附管子補正	菊地晚香
墨子上下	牧野藻洲

荀子上下 附荀子考異

桂湖村

韓非子上下

松平康國

第三輯

禮記上下

桂湖村

莊子上下

牧野藻洲

唐宋八大家文讀本（一）（四）

松平康國

第四輯

文章軌範 附漁村文話

松平康國

續文章軌範

松平康國

十八史略上下

桂湖村

戰國策上中下

牧野藻洲

國語上下

桂湖村

淮南子上下

菊地晚香

蒙求

桂湖村

一見して知られるように、第一輯から第二輯の前半までは先哲遺著、それ以降はすべて菊地晚香らの新釋である。この新舊注釋のセットからなる大がかりな双書の刊行は、『早稻田大學出版部一〇〇年小史』によれば、「種内（宗八）の案を市島（謙吉）が贊助した」もので「爆發的な賣行きを示し、

出版部はじまって以來の成功をおさめた」⁽¹⁾ものである。

市島は手記『背水錄』に第一輯の出版についてこう記している。

市島主幹となる手始めに漢籍國字解を豫約方法にて十二冊出版を計畫せしが出版部空前の大當りにて、壹萬に垂んとする豫約者を得、爲めに此年度極めて不況なりし出版部の形勢を一變し、利益を割き、學校事務員、活版所職工に至る迄總花を振り時き前途發展の獎勵を爲し常盤花壇に出版部の祝宴を張りたる位なり⁽²⁾

營業面での好成績は世の中がこの類の書物を待望していたことを意味する。第一卷の「緒言」において、なぜこの時期に漢籍國字解を刊行するかについて編輯子は熱っぽくこう語っている。江戸時代、林羅山・荻生徂徠・熊澤蕃山・中村惕齋らの學殖も豊かに兼て國文をもよくする學徒が出現し、「諺解」「國字解」「示蒙句解」「小解」等の名で經典の微旨を發揮し、これらは廣く世に行われて幕末に至った。かくして、

漢學的精神の旺盛なる時代に當り燃ゆるが如き信念に動かされて執筆したる國字解書に至りては、其熱誠紙上に躍り讀者に迫るの慨なくんばあらず。これ今時續出の冷々淡

々たる注釋書を以て、遙に往時の國字解書に及ばずと爲す所以なり。加之、漢學の隆盛時代に於ける老大家の國字解書は、平易通俗を以て其要旨と爲し、毫も銜耀の迹なきを以て、何人にも容易く讀み得るものたるに拘らず、其の研究精微を極め、幽玄の域に入りたるを以て新見卓說の到る處に溢るるを見るべし。これ豈漢學の衰頽せる現時の學者の企て及ぶ所ならんや。往時の國字解書の、特に現時に切要なる所以實に玆に在り、

と。そこで内閣文庫、東大圖書館等から孝經・大學等の國字解本の精善なるもの十七書を選び出し、これを十七卷に收めて『漢籍國字解全書』と銘打って刊行した、という。明治四十二年十月のことである。

(二)

元祿から享保にかけて、わが國の漢學界は仁齋・徂徠を筆頭にして急速な進展をとげ、わが國独自の研究成果をも生み出して、未曾有の躍進發展を示していた。こうした中で、徂徠はじめ多くの學者たちは「國字解」書を作り出していった。それは何故か。ようやく形をもちはじめた出版ジャーナリズムの要請もあったであろうが、それ以上に著者の内的な欲

『漢籍國字解全書』について (町田)

求、社會への積極的な關與が存していたように思われる。秀れた國字解を數多く殘した中村惕齋は自らこう語っている。

余嘗て片字を以て小學の書を解す。讀者顚蒙なりと雖も粗ぼ能く其の辭義に通じ、又能く人の爲に講述す。故に謄寫を請う者歳ごとに衆し。子弟其の煩を奈ともするなし。乃ち之を雕印して其の需を塞ぐ。然れども古典の解の若きは、未だ嘗て心に萌さざるなり。近時頗る實學を尙ぶ者出でて、小學四子近思錄の自脩して人を治めるに切なるを知るあり。是を以て一二の同志、併せて四子を解して以て蒙學に便せんことを勸むる者あり。又之を抑止する者ありて曰く、小學の解、或いは以て先賢訓蒙の旨に副うべし。夫の四子の若きは則ち俚語諺言の以て解すべき者に非ず、又恐らくは學ぶ者をして肌膚腠理の間に限りて終に骨髓に透るを得ざらしめん。奚んぞただ朱傳に由りて勉々循々として以て聖人の門牆を窺うことあるにしかんや。兩端未だ適從する所を知らず。是に於て試に大學及び論孟數篇を解す。聞く者多く假りて其の舛を寫して之を遊ぶ。凡そ新學の蒙、晩進の固、窮郷の陋、深閨の幽と夫の從仕して優ならず、業を執りて暇なき者と、玆に因りて稍やく學を嗜み道に嚮うことを知る。又郷里の教授、利を講辯に取る者あ

り。人君閑覽の余微しく政治に兆する者あるに至りては、乃ち敢て謂く、其の得る所、失う所よりも愈れりと。遂に其の功を完す。然りと雖も朱傳豈此れが爲に少しく其の尊を讓らんや……。 (原漢文、傍點筆者)

惕齋はまた『近思錄示蒙句解』敍において、右に述べた四子すなわち四書の國字解以上に近思錄のそれへの要望が強いことを述べる。その理由は中國の古代語には然るべき注釋があるが、近代のものはない。博洽の學者は類推しても知られようが一般の者にはできない。そこでかれらのために國字解を作った。従つて「その精蘊微趣に於ては、此の解の能く發揮する所に非ず。亦知る讀者の考求も此れを主とせざることを。特だ蒙學漸進の一助を庶幾するのみ」と。むろん謙辭である。

こうして廣く讀者に便宜を與え經典の妙處を享受せしめようとする姿勢は、獨り惕齋に特有のものではなく、全ての注釋者に共通するものであったこと、國字解の注釋そのものに見ることができ。

それでは「平易」にして「蒙學に便せん」ことの「熱情に溢れ」しかも「新見卓說」を到る處に見るといふ國字解とは、どのようなものであったのか。例を示そう。荻生徂徠

『孫子國字解』開卷第一計篇の「孫子曰く、兵は國の大事、死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり」の項。

一部十三篇共に篇ごとの始に皆孫子曰と云ことは十三篇ともにみな孫武が語なればなり。兵と云は、もと弓鎧劔矛等の武器の總名なり。それより轉じて武器を持つ人と云ふわけにて武士をも兵と云ふ。此時はつはものと訓ずるなり。此本文にては兵革などと云やうなる詞にて軍のことを兵と云、軍とは武士を用ひて武器を取りあつかふゆゑなり……。

と兵、國、死生、存亡を懇切に解説し「されば死生之地存亡之道不可不察也とは」と括つて、

兵は國の大事にて多くの人の生死も家の存亡も軍の勝負によることなれば、かやうなるを軍に勝て生くべき地とし、かやうなるを軍に負けて死すべき地とす。かやうにするは軍にからて家の存する道なり、かやうにするは軍にまけて家の亡る道なりと云ことを察し知らずしては叶はぬことなりと云意なり。かやうに説出して勝負の知やうを下の文に説きたるなり。孫子は百度戰て百度勝つ道を得て、今の世までも兵家の祖と云はるゝ程の人なれば、軍をすることは心安きことに思ふべき様に思はるゝに、一部の最初にかや

うに云たる所、尤も心を染めて深く味はふべきことなり……。

同じく計篇にあつて『孫子』の最も有名なことばの一つ、「兵者詭道也」の解では、

是は上の文に因利而制其權と云へるをうけて、此權と云ものを、合戦の上にて大切にするわけを云へり。總じて合戦の道は詭道なり。詭道と云は、詭はいつはりとも、あやしとも、たがふともよむ。是は唐の文字に倭國のことばを付て、文字の訓を定むるに、一言にてとくと、其字の意を云ひ取られぬことあるによりて、一字に二つも三つも字訓あるなり。よのつね詭道と云へば、とかく表裡たばかりを、軍の本意と定むるは僻事なり。あやしとは敵よりあやしみ、何とも合點のゆかぬことなり。たがふとよむ時は、詩經の詭隨、孟子の詭遇などの詭の字の意にて、正しき定格を守らぬことなり。故に兵は詭道なりと云は、軍の道は、とかく手前を敵にはかり知られず、見すかされぬ様にして、千變萬化定まりたることのなきを、軍の道とするなり。されば、敵よりは是をたばかると思ふゆへ、いつはりとも訓ずるなり。易の師の卦に、聖人の兵法を明し玉へり。師の卦は、外坤の卦にて、内坎の卦なり。坤は至靜をあらはし、

『漢籍國字解全書』について（町田）

坎は至險をあらはす。至て靜にして動かず、聲もなく臭もなき中に、はかり知られず、犯しきはられぬ物ある、是軍の本體にして、八陣の根元なり。孫子が兵者詭道也と云をも、こゝに本づきて是を伺はゞ、其妙處に至るべし。

まことに精細周到な注解というべきであるとともに、何としても聞く者を理解せしめるのだとの徂徠の氣迫すら感じさせるものである。一般にこの句は「敵の意表をつくこと」とかんたんに注釋され通行するが、それでは一面の解に止まることを知るべきである。

『書經』の國字解は、大田錦城の講義を門人伊藤祐義が筆記した『尙書紀聞』を用いる。康誥篇の冒頭の一文をみてみよう。

惟れ三月哉生魄、周公基を初めて、新大邑を東國洛に作る。四方の民大いに和會す。侯甸男邦采衛、百工民に和を播き、士を周に見る。周公咸勳す。乃ち洪に大に治を誥ぐ（原漢文）

このあとに漢文で古注本を掲げて、自らの句讀や訓みとの違いを明示し、ついでいう。

東坡の説にて、此は洛誥の發端と云ふことが知れた。哉生魄は、十六日なり。周公基のいしずゑをたてゝ、洛陽の大

城をきづかれた。洛水の北にあるから洛陽と云なり。此が唐の正眞の眞中じや。注の居天下土中、これまでの周は、邊鄙じや。洛は、長安のわきなり。堯舜禹湯の都は、冀州にてからの北なり。周の都は鎬京にて、雍州なり、からの西なり。天子は鎬京に居るに、此とは別じや。ここをこしらへて、四方の人のあつまるにいいやうにする……。中土じやから、それから四方の民和悦して集會する。侯甸男邦采衛は、九服の名目にて、禹貢の五服とはちがふなり。邦の字を中に間して、兩方に邦の字を、もたせて見せたるなり。周禮の太司馬職方氏大行人に、九服のことが書いてある。百工は諸役人にて百官也、都が天下の中に出来るから、民百姓が悦び服する。見士于周は、諸大名に、都の城普請のことを仰せつけらる、それを御うけ申上て、その普請を割合てするが、事を周に見るなり。土と事と通じて、皆用ゆ。さて周公がこれは大名の爲、萬民の爲になるから出精して、はたらけと、威勤と、いたわりはげまし玉ふなり……。

そして右の文をうけて洛誥篇の冒頭で、洛誥の始が、康誥の始にあるを、此に書いるべし。此ことは蘇東坡の書傳に始て云ひ出したるが卓見なり。其事は載

て集註にあるなり

と補う。「侯甸男邦采衛」の解で「邦の字を、中に間して、兩方に邦の字を、もたせて見せたるなり」は、後の王國維にも同様な見解、すなわち「上下對句」の指摘がある。³⁾このところ錦城の鋭い訓みを感じさせる一節である。また同時に難解な『書經』を噛み砕いて萬人に理解させようとする努力は注解の話しことばに近い文章からもうかがい知られる。錦城は元來「甚だ口辯あり、講説流るゝが如し。又譬喩に妙を得、解説爽快なるを以て、聴く者をして躍然として興起せしむ」⁴⁾（『書經』）といわれるが、これを筆記した伊藤祐義もよく師の講説を活寫したというべきであろう。

いま一つ例を挙げよう。『唐詩選國字解』は、徂徠門下の逸材服部南郭の講述を門人林元吉が筆録したものである。南郭がこの書のどこまで關わったか問題も存するようであるが、⁴⁾盛唐詩を金科玉條とし、何よりも人間の情調こそ詩の生命とした南郭らしい解説は隨處に見られる。よく知られた李白の「子夜吳歌」の終り二句、すなわち「何れの日か胡虜を平らげて、良人遠征を罷めん」を解して、次のようにいう。

此れも女の情に、何とぞ「胡虜」の夷を平らげて、我が夫のどこへも旅へ行かず、常住内にばかり居らるるやうにし

たいものぢや。此の二句は、見えた通りやはらかに云うたが面白い。女中の心に、あの夷とやら云ふものを平らげらるるものならば、早くどうぞ平らげて歸らいでと、女の思ふ情をあぢきなく云ふが、面白い。

通常この句は、戦役がいかに人民を苦しめるかの諷諭詩とするのであるが、南郭にはその氣はない。ただ／＼孤閨を守る兵士の妻の嘆きだけを聞こうとする。これも一つの詩解である。『唐詩選國字解』は全篇この調子である。

(三)

『國字解』本の出現の意義について、重野成齋は、漢學の日本化の視點から次の如く述べる。

五山時代及び其前後の名僧等は、佛書と共に漢籍を修め、之を徒弟に授くるや、口義體の解釋により、一種の國字解的漢籍を作りしかば、漢學は益々我國民の間に同化せられたり。徳川時代に於ても、林羅山の貞觀政要諺解は勿論、彼の山崎闇齋、淺見絅齋、三宅尙齋、佐藤直方等はこの風を承けて、所謂筆記學なるものを流行せしめ、其他諸種の俚諺抄等によりて、漢學は愈々國民に普及し、平民も亦漢學の妙趣を味はふに至れり。而して元祿・享保時代頃ま

『漢籍國字解全書』について (町田)

での漢學者は、漢籍と共に國學の修養に怠らずして、國文に長ぜる漢學者少からず。但徠の政談の如き、白石の藩翰譜及び折たく柴の記の如きは、單に漢學者の國文として妙なるのみならず、之を國學専門家の國文に比するも、名文妙文と稱すべし。如斯漢學者にして國學にも通じたるは、實に漢學の日本化について大に便利を得たり。

然るに寛政時代に至りては、彼の異學の禁等の事ありたる爲に、學者漸く偏固となり、漢學者の中にも、通例四書、小學、近思錄、或は朱子の末疏の間に一生を没し、五經に溯らざる者さへあり。我國古來の國學に注意する漢學者の如きは極めて稀となれり。是に於てか漢學の日本化については、到底遺憾なき能はざるの狀を呈したり。

こうした見解からすれば、中國古典の國字化は、文字通り漢學と國學との融和そのものであり、日本文化の重要な一翼を形成するもので、その頂點も元祿から享保といったわが國漢學界のもっとも昂揚した時期と重なり合うものであった。『國字解全書』に收める先哲の遺著も多くこの時代のものであった。その意味ではこの双書はきわめてユニークな文化遺産の集積でもあるわけである。

さて注釋の精善さという點からすれば、後發のものほど従

前の注釋の誤りが訂されて正確になる。そうでないならば新たに刊行する意味もない。従つて今日の中國古典の注釋のレベルからいえば、江戸時代の國字解は、明治末年のレベルにおいて高い評價をえたからといつてそれがそのまま通用するわけではない。經學の大家として知られる大田錦城の『書經』の注釋にしても、今日では疑義もある。南郭の『唐詩選』また然りである。それでは一體今日のわれわれにとつて、古典的な注釋書が存在意義とは何なのであろうか。

一つは「燃ゆるが如き信念」^(第一卷 解題)の發露である國字解の注釋の中に、著者の思想・信條・願望等々の主觀をよみとることができること。「冷々淡淡」たる現時の注釋とは明らかに違ふのである。それは注釋の客觀性という點からすれば、不正確さをもたらすマイナス要素であるが、一面でそれは注釋者の個性や時代を映す鑑ともなっている。つまり注釋そのものが一つの精神史であり時代史でありうるのである。そしてこれを重野成齋に即していえば、すぐれた精神史的述作は元祿から享保に多く、異學の禁以後、自由さを失つて衰弱した、ということになる。

そしていま一つは、歴史的な資料の保存の一面がある。たとえば淺見綱齋の『楚辭』は、かれが據つた慶安版の『楚辭

集解』が中古の訓讀法を伝えるきわめて珍貴なものであった。綱齋もこの訓み方を踏襲して送り假名をつける。すなわちまず音讀し次に意譯しつつ講述をすすめるという方法である。たとえば「余幼好此奇服」の場合には「余幼くして此の奇服を好す」と讀まずに「余幼くして此の奇服のアヤシキコロモを好す」と讀むわけである。カナ書きの部分が意譯である。離騷の一二節を書き下して掲げておこう。

紛とサカンニシテ既に此の内美のウチノヨキコト有り、又之に重ぬるに修能のナカキクマワザヲ以てせり、江離とエノカウハシキクサト辟芷のカスカナルカウハシキクサとを、秋蘭を綴^ついで以て佩^ひヲモノト爲せり。

朝には木蘭の墜露のオツルツユヲ飲み、夕には秋菊の落英のハジメノハナビラヲ餐へり、苟とに余が情^{こころ}ろ其れ信とに誇^ほく以て練要とクワシクツツマヤカニシツ、長く願領とウエキバムトモ亦た何を傷ん。

往時の訓讀法の如何なるかを知る恰好の資料というべきであらう。

またこの双書の特徴ともいえるものに、附録の諸書がある。たとえば『小學』には山本焦逸の『童子通』、『管子』に

は猪飼敬所の『管子補正』、『易經』上には神原篁洲の『易學啓蒙』及び谷川順裕の『階梯附言』、下には同じ谷川の『本筮指南』、『近思錄』には伊藤東涯の『用字格』、『詩經』には淵景山の『詩經圖解』、『文章軌範』には海保漁村の『漁村文話』、『楚辭』には淺見綱齋の『楚辭辯證』、『荀子』には桂湖村の『荀子考異』が附載されている。

右の附載書は、多くは單行本としては入手困難な書であり、もしこの双書に附載されなかったならば、恐らく時ととも散佚し或いは忘れ去られていったに違いないものである。そうした一つに猪飼敬所の『管子補正』がある。郭沫若は『管子集校』の提要で参考文献としてこの書をあげていう、「日本寛政十年（清嘉慶三年）刊本、說解簡要、頗多揭發、此書刊行在洪・王諸家著述之前、以爲清代學者所未見」で、さらに安井息軒の『管子纂詁』の條で「安井頗自負、然較之猪飼彥博、相懸遠甚」と猪飼に高い評價を與える。この評價には疑問の餘地もあらうが、『管子』研究に缺かせぬ一書であることは確かである。また、三多三上の論、十弊三失の論等の文章作法を論じた海保漁村の『漁村文話』にしても、この双書でカナ文を平がなに改めて収載したことは、後學として便宜この上もない。これらの書、よくぞ活字本として残し

『漢籍國字解全書』について（町田）

てくれたとの思いが強い。

それではこれらの書物が具體的にどのようなものであるか一例として、山本焦逸の『童子通』をみてみよう。この書は「時に幼稚の説なきに非ずと雖も、その説く所は何れも初學の知らざるべからざるもの」（解題）である。確に一讀に價する。たとえば「句讀音訓の事」の條

春秋の□□弑其君□□及其大夫□□とよむべきを、其君□□及其大夫と云は非也。弑は下より上をころすことなれば、及び大夫□□を弑すとよまば、弑の字を同席に用ひたるやうに聞ゆる故、別に一句としてよむこと故實の由、左もあるべし、

という。伊藤東涯の『用字格』のいうところもほぼこれに近い。

「讀むべき書籍の次第」の條

今時都下にて、幼者に書を授るは、大學を先とし、四書了れば五經也、爲學の次第尤のことなれども、十に八九は才乏き者なれば五經了れども通用の書簡、及び假名本もよめぬもの多し。是は畢竟、記憶の力をもはからずして、多きを貪り、四書五經の名はあれども、其實は孝經一卷の句讀も出來ぬ者ゆゑなれども、世の習はしも向上すぎたるによ

れり。やはり田舎風に、貞永式目、今川帖、庭訓往來等を并せよむべし……。扱その内に五經の句とう了^{すん}だらば、孔子家語、劉向新序、朱子の小學、及び蒙求、古文眞寶前後集、唐詩選、三體詩等、次第にはげむべし。扱右の書を授かる内に、前にあげし通俗ものも、追々卒業すべし。其ところへ、讀史餘論、保建大記、國史略、日本政紀、外史、逸史等、彼土にては讀史論略、十八史略、元明史略、清三朝史略、歷史綱鑑をみるべし。これにて歷代のこと、大抵しれる也。これより日を追て、左傳、國語、史記、漢書をよむべし。此四部を左國史漢と申て、此があらましにもすめれば、もはや幼學の沙汰にあらず、これからは溫史、綱目、十七史乃至廿一史までも、氣根次第たるべし。十三經廿一史を通覽すれば、一分の學者たるべし。

(四)

第二輯初卷『春秋左氏傳』上の「緒言」にいう。「先哲遺著の長所と其缺陷」は、その長所は「先哲が信念を以て學問普及の爲に講述した」點であるが、「儒教以外の諸子類が、異端邪説として讀書界から葬り去られたるが如き」は短所とせざるを得ない。諸子類では老莊等の一二の書を除いては秀

れた注釋書や國字解がない。そこで「管墨荀韓」の四典籍を新釋し、これに左氏傳、傳習錄、楚辭の七部十三冊を追補して第一輯と併せて全二十五冊の完璧を期した、と。

『漢籍國字解全書』はつごう第四輯まで刊行されるが、右の記述からすればこの全書の軸は第一二輯にあったとしてよい。事實「先哲遺著」は、第一輯から第二輯の半ばまでであつて、第三四輯は全て新釋である。つまり第三四輯は前二輯の補遺なのである。たとえば第三輯の『禮記』は、第一二輯において五經中で「禮」のみ缺けるためここに補つたのである、『莊子』は第一輯がその内篇のみであつた缺をここで補つたものである。

さて、第二輯のいわば目玉ともいふべきものに諸子類の『管子』『墨子』『荀子』『韓非子』の新釋があつた。『管子』の新釋を行った菊地晚香はその「例言」で、上記四書は「其着想の警拔なる、其敘述の精微なる、今日の西歐哲學に髣髴し、學界必須のものたるに拘らず、先哲の研究甚しく缺如し、其の國字解の如きは絶へて無きものたり……。これ現代大家の新釋を求めて、先哲遺著の追補となし、以て本全書の完成を圖れる所以なり」といふ。

『墨子』は牧野藻洲が擔當する。かれは「凡例」に「近世

清の畢沅に經訓堂墨子あり、孫詒讓に墨子閒詁あり。畢注は獨り彼邦に行はるゝのみならず、傳へて我邦に至り、天保年間飜刻の書あり、孫注は其我邦に見るや年尙未だ久からず、世人多く見ること罕なり。然れども其の校訂解釋、廣く諸家を稽徴し、亦往々獨闢の説見るべき者あるは、畢注の及ぶ所にあらず。今據りて底本となし、尙ほ本邦先儒及び清人の諸説を斟酌し、務めて解釋の公正ならんことを期す」「但し古人の俱に未だ道破せざる處、及び其の説ありと雖も未だ安からざる者は則ち竊かに臆見を附し以て大方家に質正す」という。孫詒讓の『墨子閒詁』の完成は光緒十九年、俞樾の序を附して出版されるのが光緒二十一年、すなわち明治二十八年である。牧野はまさに中國の最新の研究書を正しく評價してこれを底本としつつ、しかも疑義は自らの判斷を以て新釋を行ったというのである。

牧野は第三輯の『莊子』の講述者でもあるが、その「解題」において、第一輯の『莊子』は林希逸の口義によって内篇を譯出しているに過ぎないので、牧野が新たに全篇を講述した旨を述べ、その價值について自ら「講述者が嚮に本全書の爲に公にせる『墨子國字解』が和漢古今何人にも讀み得ざりし最難讀の墨子を詳解して一世の漢學者をして驚倒せしめ

しことは、近く何人も知る所なれば、此國字解の價值に就ては茲に之を喁々するを要せざるなり」と絶大の自信のほどを『墨子』にかけて示している。事實牧野の國字解の評價は當時頗る高かった。たとえば『漢籍國字解』にやや遅れて刊行された双書『漢文大系』にも『墨子閒詁』が收録されるが、その「例言」において編者の小柳司氣太は「墨子ノ注釋ハ解題ノ中ニ述ベタル如ク、戸崎允明著墨子考ノ外、多ク得ガタキモノナリ。幸ニ早稻田大學教授牧野謙次郎君著ノ墨子國字解二卷ハ博ク諸家ノ祕冊珍籍ヲ參考セラレ、其所說ヲ引證シタルモノ頗ル多シ。蓋シ邦人解釋中ノ白眉ト謂フベシ」と絶賛している。大正元年のことである。

『荀子』は桂湖村の注解で、邦人久保愛の増注本を底本とする。わが國では荻生徂徠の『讀荀子』が秀れ、その後冢田虎『荀子斷』、桃白鹿『遺秉』、猪飼敬所『補遺』、東條一堂『標議』などが出現したが、久保愛の『増注』が卓見多く秀拔である。その説くところは往々にして王先謙の『荀子集解』（光緒十七年、明治二十四年刊）と暗合する。恐らく湖村にしても『集解』の存在もその評判の高いことも承知していたであろうが、邦人の秀れた注釋を尊重したい意向から増注本を採用したのであろう。なお『漢文大系』は『集解』を中心

に『増注』と猪飼の『補遺』とを合せて編集する。

『韓非子』は松平破天荒齋が擔當する。その自序にいう。

「曩には早稻田大學出版部漢籍國字解を刻す。收むる所は皆な前脩の著なり。今又續刻の舉あり。而して管墨荀韓の四子、注本ありと雖も、悉く漢文に係り、絶えて國字注なし。乃ち牧野藻洲、菊地晩香、桂湖村と余とに囑し、分ちて之が解を作らしむ。余の韓非を得たるは、其の嘗て法律を學びしを以てなり。抑も韓非は初め荀卿を師とし、終に法術に歸す。余なれば則ち法家を出でて孔子の徒となる。その跡反すと雖も、學ぶ所は通ず。此の書を解すべきに庶幾きか」(原漢文)

『管子』は菊地晩香の講述。元來『管子』は明の趙用賢が「錯雜而不可讀」⁽⁷⁾と歎くようにきわめて誤脱が多い。とりわけ「侈靡」篇などそうである。從來唐の尹知章から始まってわが國の安井息軒に至るまで多くの注釋考證の書が刊行されている。それでも問題の山積する諸篇、たとえば侈靡篇などを首尾一貫して筋の通った通釋を行うことはなかなか困難である。そうした中で晩香の譯は、安井息軒の『纂詁』の注解を主としつつそれなりに筋を通してゐる。苦勞な譯業であつたと思われる。

こうして先哲の遺著にとりまぜて新進の學徒による斬新な

注釋、從來口語譯されることのなかつた諸子類を、中國の最新の研究成果をも十分に生かした全書の刊行は、はたして江湖に大きな波紋を起すこととなつた。

第三輯の「緒言」にいう、「漢籍和解書の我學界に切要なる絮説を俟たず。是れ嚮に發行せる本全書の第一輯第二輯が、共に非常の好評を以て江湖に迎へられ、出版界異數の盛況を呈せる所以なり。斯の如き大部冊の書にして、其流布の廣汎なる未だ曾て本全書の如きはあらず。一世の渴望、以て卜すべきなり」あながち自家の宣傳ばかりではあるまい。事實好評だつたから、第三四輯の完結後も、『史記』『唐宋八家文』の『二大漢籍國字解』の刊行もひき續いて行われたのである。

なお『漢籍國字解全書』の新釋の部を擔當し、かつ實質的に全書の刊行を支えていたと思われる菊地、牧野、松平、桂の四氏の略歴を次に記しておこう。

菊地晩香(一八五九—一九二三) 和歌山の人。名は武貞、字

は仲幹、通稱は三九郎、號は玉溪、晩香。早稻田大學教授。大正十二年十月歿、年六十五。『管子』『淮南子』『史記』世家の國字解。『莊子』『列子』『楚辭』の和解がある。

牧野藻洲(一八六二—一九三七) 高松の人。名は謙次郎、字

は君益、號は藻洲、寧靜齋、愛古田舎主人。藤澤南岳・片山冲堂に學び、のち上京、松平康國の紹介で早稻田大學に教鞭をとる。大正年間東洋文化協會理事、大東文化學院教頭。昭和初期早稻田高等師範部部长。早稻田大學教授。人となり清廉潔白、文章をよくす。大隈重信は東洋事情に精通したかれを見出し、その顧問格としたという。昭和十二年三月没。年七十五。『日本漢學史』『寧靜齋文存』『愛古田舎詩稿』等がある。とりわけかれの名を重からしめたものに『墨子國字解』があった。

松平康國（一八六三—一九四六） 江戸の人。名は康國、號は天行、破天荒齋。東大豫備門にて英語を學び、のちミシガン大學にて政治法律を學ぶ。歸國後讀賣新聞記者、ついで清國直隸總督袁世凱に招かれて渡清、のち湖廣總督張之洞の顧問となる。明治四十一年早稻田大學教授。また東洋文化研究所、無窮會等で指導に當る。詩文をよくす。大正二年の「早稻田大學教旨」の起草委員。昭和八年『松平天行文抄』刊行の際、これに「自序代り」の一書を附して自己の經歷を述べている。昭和二十一年一月没。年八十四。『韓非子』『唐宋八家文』『文章軌範』の國字解、『天行文抄』等がある。

『漢籍國字解全書』について（町田）

桂湖村（一八六八—一九三八） 新津の人。名は祐孝、通稱は五十郎、號は湖村、雷庵。明治二十五年、東京專門學校卒。日本新聞記者となり、ついで早稻田大學教授。東洋大學・國學院大學にも教鞭をとる。博學で漢詩文に通じていた。昭和十三年四月没。年七十一。著書に大冊の『漢籍解題』及び『荀子國字解』等がある。

（五）

明治三十年代から末年にかけて、わが國は日清日露の兩戰役に勝利を收め、アジアの先進國の地歩を確立し、日本を學ばんとする中國からの留學生も増大した。國民の關心も、いまや朝鮮を飛びこえてアジア、とりわけ中國に向つていた。中國語の教本が工夫され始めるのもこの頃からであった。また漢詩壇も森春濤、槐南父子を中心にして空前の昂まりを示していた。一般社會にも從來の西洋學術一邊倒からわが國の優良な傳統文化を冷靜に見直そうとする空氣が育つてきていた。教育制度も次第にととのつてきた。こうした明治末年の狀況を、漢文教育の視點から服部宇之吉はこう述懐する。

明治四十二年頃には漢文を專攻する學生を有する學校は兩帝國大學文科大學、兩高等師範學校、早稻田大學、國學院

大學、二松學舍等が數えられるだけであつた。その後帝國大學法文學部の増設、私立高等專門學部の増設の爲め漢文專攻又は國語漢文兼修の學生生徒著しく増加した。此に於て漢籍の需要著しく増大し、従つて漢籍専門の書店も増加したのは勿論、兼ねて漢籍を取扱うものも大分見える。東洋學研究熱の更新と相伴う當然の現象である。

こうした時運の中で、双書『漢文大系』（富山房）が企畫され、『漢籍國字解全書』の刊行も行われたのである。他にもこの時期『校注漢文叢書』（博文館）、『漢文叢書』（有朋堂）、『和譯漢文叢書』（玄黃社）、『漢文大成』（國民文庫）と類書が陸續と出版された。むろん時代の要請あつてのことである。

そしてこの漢籍の出版は、大別して二つに分かれた。一つは『漢文大系』による漢文體の原典原注主義、いま一つは『漢籍國字解』に代表される國字解つまり口語譯である。

『漢文大系』は、今日に至るも版を重ねる隠れたるベストセラーで、事實秀れた双書であり、明治末期以來の漢籍の需要にこたえる待望の書であつた。だから江湖に歡迎された。しかし時代は確實に變つていった。たとえば『漢文大系』は、漢學隆盛の機運に乗じて刊行された漢文の原典原注主義であつたが、本來白文が建て前であるべき原典原注に、すべ

て句讀、一二點送り假名をつけて刊行せねばならなかつた。いわばこうした形式でなければ、もはや世間は受けつけなかつたのである。この點を『史記國字解』が明白に指摘する。

過ぎし漢學隆盛期には漢文研究には自ら漢文の註釋書行はれ、國字の註釋書は初學の用に供せられしに過ぎず。然るに現代に在りては、國字の註釋に非ざれば殆ど用を爲さざるに至り、曩の補助的書籍は今却て本幹書籍に變じ、國字の註釋なき漢籍は今や高閣に束ねられんとす。近時漢籍國字解書の廣く世に行はるるに至れるもの洵に偶然に非ざるなり。（第一卷發行要旨）

漢籍の國字化はいまや時勢としてそうなのだという。事實その後の中國古典の出版はすべて國字解の流れに沿つて行われ、『漢文大系』の形式によるものは絶えてない。

ところで『漢籍國字解全書』はすべて早稻田大學出版部の名において刊行された。恐らく市島謙吉らが中心となつて事業をすすめ、これを輔翼する形で早稻田の松平、牧野らの教授陣が終始參畫したものと思われる。しかし今日からすればここに問題がある。編輯責任についてである。たとえば『書經』の「解題」に次のようにある。

今茲には錦城の講述を門人伊藤祐義が筆記せる尙書紀聞を

收む。書中、新見卓説の極て多きに拘らず、原本は筆記者の再訂を経ざる寫本なるを以て、誤脱頗る多くして往々にして文を爲さず意義の透明を闕くものあり。故に印刷に附するに方りて、誤脱の訂正に務めたりと雖も、猶未だ完全ならざるの憾なきにしもあらず、讀者請ふ之を恕せよ。

これによれば底本の校訂は、すべて「出版部」の責任において行われている。當時の知識人として出版部に所屬する人物がかなり漢學に造詣を有つものであったろうことは推想しうるが、切角幕下に新進の四學徒を擁しながらなぜ専門家の責任において、その名を明白にして校訂を行わなかつたのか、理解に苦しむ。『全書』の缺點であろう。この點『漢文大系』が服部宇之吉を總編輯とし、各卷ごとに編輯責任者を明確にして事業を推進したのとは大いに懸隔する。

(六)

明治四十二年という時點で早稻田大學の出版部が中國古典の國字解本の叢書『漢籍國字解全書』を刊行する意圖は、一つはかつて中村惕齋が情熱をこめて「得る所失う所よりも愈れる」示蒙句解本を作成して學問の廣がりを期待したことを軌を一にする。端的には大學の枠を超えたいわゆる校外生、

『漢籍國字解全書』について（町田）

一般社會への『全書』の普及を目ざしたことである。そしていま一つは歐米の古典や名著に壓倒されて全く顧みられることのなかつたわが國の漢學研究の秀拔なるものを選び出しこれを江湖に周知させ、しかも現今の漢學の實力の衰退期にあつては、原典主義は通用せず、初學者向けの國字解の精なるものでなければならぬ、としたことにある。

この企畫は的中した。まさに時宜に適つたものだったからである。

それにしても「先哲の遺著」の尤なるものを選んで古典の全てを網羅すること自體きわめて困難である。まして國字解本に限るとあつてはいっそうである。採擇上で學派や學問系統の不統一さが生ずるのもまた已むをえない。たとえば經書の粹でみても、『詩經』や『論語』は朱子學派の中村惕齋、『書經』は考證學派の大田錦城、『易經』は象數易家の眞勢中州、『春秋』『禮記』は近人の書き下ろしといった具合である。従つてそこに立場の相違や見解の不統一さは免れ難いのであるが、こうした點を責める以上に、先人の述作の再刊、たとえば惕齋の『詩經』、徂徠の『孫子』等々の刊行をこそ評價すべきである。少くともこれらの名著がいたつてポピュラーな書となつたわけだからである。そして附け加えな

ければならないことは、本書に附載された『童子通』『管子補正』『漁村文話』等々の書もこの全書に収載されることがなかったならば恐らく今日では入手困難でひどい場合には散佚してもいたであらうことである。資料保存の面からも全書は大きな貢献を果たしたといつてよい。

そして今日の時點から菊地・牧野・松平・桂の四教授の新釋をみると、それは明治の時點から元祿・享保の國字解をみるに等しい。つまりかつての新釋もいまや十分に「先哲の遺著」なのである。本稿においてはこれら新釋の内容のくわしい吟味にまでは立入れなかったが、これらは間違いなく明治を語る主要な資料なのである。

要するに『漢籍國字解全書』とは、總體として大きな「先哲遺著」の集積であり、それは江戸から明治大正期に至る時代史・漢學史の資料であるに止まらず、より廣く日本近代の學術文化を探るべき恰好の資料集なのである。今後大いに考究されて然るべきものである。そしてこの一大事業である『全書』の刊行が、早稻田大學の大學人のみの手によって完遂されたこと、早稻田漢學の根幹を知るためにも強く記憶されねばならない。⁽¹⁰⁾

注

- (1) 『早稻田大學出版部一〇〇年小史』五三頁（早稻田大學出版部編・一九八六年）
- (2) 同右
- (3) 池田末利『尙書』二九二頁（集英社『新釋漢文大系』所收）
- (4) 『唐詩選國字解』日野龍夫解説參照（平凡社『東洋文庫』所收）
- (5) 重野成齋『日本的漢學に就て』三九九頁（名著普及會『重野博士史學論文集』上卷所收）
- (6) 郭沫若等著『管子集校』上一八頁
- (7) 『管子』修麿編の標題注
- (8) 以上『早稻田大學八十年誌』（早稻田大學出版部昭和三十年）大野實之助『往昔回顧』（『中國古典研究』二〇號）所收、『早稻田百人』（別冊「太陽」昭和五十四年十一月）等による。
- (9) 「富山房五十年記念に際して」（『富山房五十年史』所收）
- (10) なお『漢籍國字解全書』と『漢文大系』とは時期的にも重なり併せて考察すべきである。拙稿『『漢文大系』について』（九州文化史研究所紀要」第三十四號所收）を參照されたい。